

多文化を	ささえ	人びと
ささえ	える	

医療通訳サービスのある病院

りんくう総合医療センター 市立泉佐野病院

異国で病気になったときほど心細いことはない。ことばの障壁から症状の説明もままならないうえ、生活習慣も医療制度も違う。医療通訳は多文化社会に必要不可欠である。日本ではまだ数少ないこの機能を備えているパイオニア的存在の事例を紹介する。

外国出身の住民との活動に携わるなかで、もつとも大切だと痛感しているのが、病院での意思疎通の問題である。ことばの理解が不十分な患者は、体調が悪くても我慢していたり、病院に一人で行って病状を理解しているようにみえても、かなり不安を残していたりする。実際にまことばはわかっていても、しくみが異なるので納得できないなど、病院での意思疎通の問題は地域医療のコミュニケーションという観点からも、早急に考えなければならぬことは自明である。



病院内の案内も多言語で表示している

しかしながら現状は、医療機関が自らのサービスとして医療通訳を実施しているケースは少ない。外国人支援の市民団体や個人のボランティアに依存している場合がほとんどだ。



中国人患者への産後指導は中国語通訳者が担当する

「軸足は地域に、目線は世界へ」 を病院のスローガンに

りんくう総合医療センター市立泉佐野病院は、日本ではまだまだ数少ない医療通訳を導入している病院のひとつである。健康管理センターでは「国際外来」と「女性外来」の窓口を設け、「軸足は地域に、目線は世界へ」というスローガンのもと、地域医療の改善に尽くしている。

そのセンター長を務めるのが、南谷かおりさんである。この病院は関西国際空港の対岸に位置する関係もあり、受診外国人患者が二〇〇五年度に四七〇人を突破。看護師にアンケートしたところ、平均で年三回以上、外国人患者とのコミュニケーションで困った経験をもっていた。そういうこともあり、二〇〇六年四月に予約制の国際外来を開設した。医療通訳を希望する患者は、観光客

よしみ しづよ
吉富志津代
NPO法人多言語センター FACIL 理事長
南米の領事館勤務などを経て、阪神・淡路大震災後は多言語コミュニケーション放送局「FMわいわい」設立を契機に、多言語環境促進や青少年育成を切り口とする在日外国人自助活動支援に従事。著書に、『多文化共生社会と外国人コミュニケーションの力』（現代人文社、二〇〇八年）などがある。

というわけではなく、むしろ日本に在住する外国人で、約七五パーセントを占める。

日伯両国の医師免許をもつ 南谷さんは四力国語を操って

南谷さんは日本放射線科学会専門医、検診マンモグラフィ読影専門医、人間ドック認定医でありながら、年間五〇〇件近いスペイン語、ポルトガル語、英語の通訳のうち、約七〇件をこなしている。設立初年度は八八件の依頼のうち、六九件を南谷さんがこなした。

現在は通訳者も六〇名近くにはなっているが、常勤で毎日病院にいる南谷さんへの依存は大きい。

南谷さんは、ブラジル国医師免許と日本国医師免許の両方をもつ医師であり、しかも、日本語、英語、ポルトガル語、スペイン語を理解するという希有な人材である。

父親の仕事の関係でブラジルに渡ったのは一二歳（小学校六年生）のときで、現地の学校に通いながら日本人補習校にも通い、ふたつのことばを習得していった。大学受験は得意な科目で点数を稼いで合格したが、大学一年生のころはポルトガル語は理解できるものの、まだ流暢には話せないレベルだった。医学部の講義も全部は聞きとれず、いつも友達達のノートを借りてうつつして勉強していたとのこと。

ことばの置き換え ではすまない医療通訳

ブラジルの医師免許を取得し、研修後二七歳で帰国し、日本の医師免許も取得した。日本の医師免許取得には、日本語能力試験一級に受かることをはじめ、さまざまな難しい条件をクリアして三年かかった。

医療の現場でコミュニケーションが十分にとれないことの不安を誰よりも理解している南谷さん。だからこそ、自分の専門部署がありながらも、院内を走り回って通訳することの意義を実感している。

医療現場の不十分なコミュニケーションは、医療機関側にとっても不安であるはずだ。医療通訳は、単なることばの置き換えではない。その背景にある社会、病院環境、患者の感情、医療機関側の専門的な視点



ブラジル人患者に医療通訳中の南谷さん



ペルー人患者の相談にのる

（専門用語ではなくて）に配慮して、その患者にとっていかに最善の治療をするかが大切でありそれは医療の原点でもある。がん患者が、通訳者が入ることで医師への信頼度を高め、安心して治療を受けた例もある。健康保険に入っていないか、た外国人患者が、通訳を介して生活全般を知ることにより、適切な社会制度を活用できたケースもある。

医療機関への地道なサービス

南谷さんは、なによりも医療機関自体が医療通訳を理解する必要性を強調する。

二〇〇九年七月に開催された医療通訳士協議会シンポジウムでも「通訳を入れると治療率が上がる」「無駄な検査をしなくても診断ができる」という発表があった。欧米で医療通訳システムが発達したのは、医療通訳の存在が、早期発見、早期治療につながる、明らかに医療費の節約になるからだという報告もあった。



南谷さん、医療通訳者、診察が終わり安心するブラジル人患者とその家族